
日韓関係とナショナリズムの「起源」Ⅱ —— 平等とルサンチマン ——

Japan-Korea Relationship and the 'Origin' of Nationalism II: Equality and Ressentiment

土佐 昌樹
Masaki Tosa

Abstract:

The imperialistic expansion by the West presented a difficult task of redefining the collective identity of people in East Asia during the latter half of the 19th century. Nationalism, or the concept of nation, was a dominant force to accelerate such process interacting with similar but rival ideologies such as colonialism, socialism, and Asianism. The Japanese colonial domination of Korea, which started in 1905, induced a sharp contrast between nationalisms of the two countries. Japan needed an ideology that could rationalize the nationalistic solidarity on one hand, and its colonial expansion on the other hand. So the state should be predominant over ethnic identity. But Korean people sought a different type of nationalism with emphasis on ethnic identity, rather than the state that had been deprived of by Japan. In other words, Japan developed state nationalism, while Korea developed ethnic nationalism.

In this paper, I will elucidate the meanings of this contrast focusing on two representative intellectuals of that time, Fukuzawa Yukichi (1835–1901) and Shin Chaeho (1880–1936). Fukuzawa has been one of the most prominent intellectuals in Japan who led modernization process. He showed deep understanding about the significance of equality, not as an idealized goal but as a secular condition for capitalistic competition. He was an enlightenment thinker and an active journalist at the same time; as such he endeavored to propagate this message to people in Japan. His message even affected some Korean intellectuals who tried to modernize their country. Fukuzawa tried to support their movement in an activist way. But since the idea based on traditional hierarchy was much more influential than nationalism in Korea, those endeavors all failed in a tragic way.

Shin started his career as a journalist just before the colonial period. He fled to China to escape from the Japanese rule, and vigorously continued his activities playing a triple role as a journalist, a historian, and an activist. He believed in supremacy of Korean nation, which could be revealed through history regardless of vicissitudes of the state. So he explored the archaic history and found the father of nation, Dangun. He created pure independent history of Korean people uncontaminated by China

or Japan. Although he inspired absolute antagonism against Japanese colonialism in a militant way, he was rather disappointed with real activism. He gradually approached an anarchist way of thinking in his late days, but his ideas are still influential in today's Korea, both North and South. He represents the first generation of Korean nationalism.

Fukuzawa and Shin never met each other in real life, but the complex interactions between the two nationalisms epitomized by them did play a vital role in the real world.

Keywords: nationalism, Fukuzawa Yukichi, Shin Chaeho, minjok, freedom and equality

キーワード：ナショナリズム、福沢諭吉、申采浩、民族、自由と平等

1. ナショナリズムの翻訳

アメリカの歴史学者、アンドレ・シュミットによれば、朝鮮で「民族(ミンジョク)」という語が広く使われ始めたのは、一九〇五年の保護条約締結後のことだという(シュミット 2007: 146-148)。多くの近代概念がそうであったように、この語も西洋の語彙が日本語に翻訳されてから、中国語や朝鮮語の中に採用されていった。より具体的には、政治学者の加藤弘之(一八三六～一九一六)がドイツ法学者、ブルンチュリの『国法汎論』(一八五一～二)を翻訳するなかで、“Stat”、“Volk”、“Nation”の区別を「国家」、「国民」、「民族」という漢字語に置き換え、それがそのまま東アジアに広まったというのがシュミットの推測である。この訳語は今日の対応とずれているが、それはブルンチュリ独自の用法に従ったからだ。

朝鮮で民族の語が普及することを助けたのは、生まれて間もない新聞メディアだった。たとえば、一八九八年に創刊され、有力紙の一つであった『皇城新聞』は、一九〇〇年ころから民族の語を使い始めるが、当初は「東アジアのすべての人々を包含する朝鮮を超えた人種的な単位」を意味していた。個別の国家に属する民族というよりは、「白民族」に対する「東方民族」という文脈で用いられることが多く、むしろそれは社会進化論を前提とした「人種」の概念に近かった。やがて、朝鮮半島が日本の支配下に置かれるようになるに従い、「民族」はその地に住む人々を意味するよう限定されていく。

社会学者のシン・ギウクは、朝鮮半島におけるナショナリズムの歴史を多角的な観点から分析した『朝鮮の民族主義』のなかで、二〇世紀をまたぐ時期の新聞記事を見るかぎり、当時はナショナリズムよりアジア主義のほうが目立ったイデオロギーであったと結論づけている(Shin 2006: 24)。アジア主義とは、日本の論壇に影響を受けながら、「白色人種」対「黄色人種」というかたちで人種をアイデンティティの基礎に据える考え方であり、「アジア連帯論」「東洋主義」「東洋平和論」「三国同盟説」といった用語が新聞メディアに踊った。金玉均、尹致昊、さらに伊藤博文を暗殺した安重根などの人士がアジア主義に魅力を感じ、日中韓の同盟を通じて欧米に対抗するという構想を打ち立てた。ただ、日本のアジア主義と異なるのは、全体構想の中で日本はあくまで「調和的、統合的リーダー」の位置にあるとしても、特別な支配的役割を認めなかった点である。

そうした思想的流れに大きな転換を迫ったのが、一九〇五年の保護国化だった。実質上、独立国としての体裁を失った朝鮮は、帝国主義的侵略に対抗して独自の社会的アイデンティティを模索する課題を知識人らに突きつけた。固有の領土や政治的独立を失う過程で、その探求はより精神的なレベルへと向けられ、欧米はもちろん、日本にも中国にも依存することのないアイデンティティを確立することが急務となったのである。

その後の展開は、日本のナショナリズムが「国家主義」へと傾いていくのに対し、朝鮮のそれは「民族主義」へと傾いていったと要約できるだろう。ナショナリズム、ないしネーションという新種の概念は、東アジアに着床するにあたり翻訳と幾重にもわたる創造的解釈やトランスナショナルな相互作用を経ながら、独自の「亜種」を生み出そうとしていた。本稿では、そうした考察に入る前提として、ナショナリズムの概念が19世紀後半の日本と朝鮮でどう受容されたか、あるいはされなかったかについて、自由と平等の観念に注目するグリーンフェルド的な視点からあらためて見ておきたい。日韓両国の差異と共通性を凝縮して表象している代表的な思想家として、日本の事例は福沢諭吉、朝鮮の事例は申采浩シン・チェホに焦点を当てることとする。

2. 日本におけるネーションの着床

2-1. プロト・ナショナリズム

19世紀後半、ナショナリズムという新たな考え方が日本にも届き、社会と文化に根底的な変化を促した。封建的な身分社会は平等性と自由を原理とする近代社会へと変貌せざるを得なくなった。そう要約するのは簡単だが、実際に何がどう変化したかを記述するのは極めて難しい。困難さの一つの要因は、いったん新たなパラダイムが成立すると、それが過去に対する見方までも一新させてしまうことにある。ネーションという言葉は19世紀以前の日本にはなかったとしても、「日本人」は悠久の歴史をもっているという主張が、ナショナリズムというパラダイムそのものによって現実性を獲得していくのである。そのことは、ナショナリズムを自由や平等という原理にまで分解してもさして変わらない。実際、社会的・文化的な革新がゼロからなされることはないので、この点は左右の歴史観の違いを超えた問題を内包している*¹。ここではこの問題を全面的に展開する余裕はないが、断片的な指摘だけでもしておきたい。

すでに古典的な研究書の位置を占めているR・ベラーの『徳川時代の宗教』は、この問題を考える上でも欠かせない参照点である。本書は宗教的イデオロギーと経済的近代化の関係というウェーバー的な問題設定に焦点が当てられており、江戸時代に民衆に浸透していた儒教・仏教・神道の特定の側面や、石田心学に代表される新宗教運動が、勤勉、儉約といった資本主義に適合的な価値を社会的に育み、比較的スムーズな近代化を準備したプロセスについて緻密に例証している。しかし、安藤昌益を例外とするなら、前近代の日本には身分制の解体を唱えるブルジョア的な自由主義の萌芽が見出しがたいと指摘してもいる（ベラー 1996：350）。

これに対し、日本近世史の最近の研究には異なる見方を示唆する例も現れつつある。たとえば、前田勉は江戸時代に盛んになった会読の伝統を詳細に分析し、身分制度を超えた公的なコミュニケーション形式が前近代の日本にすでに育っていたことを明らかにした。会読とは、「複数の人が定期的集まって、一つのテキストを討論しながら共同で読み合う読書・学習方法」（前田 2012：54）のことであるが、そこには、「相互コミュニケーション性、対等性、結社性という三つの原理」が働いていた。それは、今でいう大学のゼミに近いものであり、封建的身分にとらわれない（といっても基本的に農民や町民は除外された）ブルジョア的な「文芸的公共圏」であった。ハーバーマスがヨーロッパの歴史的な文脈で明らかにしたように、それこそが「政治的公共圏」に先立つ開かれた政治的論議の「練習場」であったと位置づけることが可能である（ハーバーマス 1994）。会読が競争原理を育てたという指摘もこの文脈で重要なポイントだが、そうした伝統が近代的な学校の平等性と競争性へと接合され、また明治維新を支えた横断的なネットワークを準備したという。福沢諭吉は、まさにこの会読の伝統の後継者であった。

もう一例だけ挙げるなら、鈴木貞美は、『自由の壁』という一般向けの書物において、前近代の日本社会でいかに平等と自由の概念が育まれていたかを検証している。たとえば、江戸の支配的イデオロギーである儒教には天道の思想があり、身分を超えた平等の観念がそこに含まれていたという。石田梅岩、二宮尊徳、荻生徂徠などの人物が、江戸時代に天道思想を民間に普及させた典型的な実例として紹介されている。また、朱子学の教条主義に対して批判的だった陽明学が日本では大きな役割を果たした点にも注目し、藤原惺窩や佐藤一斎などの例が挙げられている。

明治維新の前から日本には一種の平等思想が普及していたのであり、だから「福沢諭吉らは天道

思想にのっって「自由・平等」を説くことができたし、それが当時の日本の民衆にわかりやすかった(鈴木 2009: 44)という解釈が可能になる。また、幕末には陽明学の「立志」という言葉が流行し、ナショナリズムの基礎となる独立心や自由の気風を用意した。

こうした点は、朱子学だけを正統な国教として崇めた朝鮮との対比でしばしば指摘される論点も含んでいるが、それをバランスよく評価することは容易でない。そうした対比を絶対視するのも間違いだが、逆に近代という制度がいきなり外部から与えられたとする見方も見識を欠いている。たとえば、冒頭で触れた加藤弘之(鈴木によれば陽明学の素養をもつ)をはじめとする明治の知識人は、それ以前の思想系譜に連なりながら新たな時代の課題に取り組んだのであり、その一環としてネーションの概念の翻訳もおこなわれたのである。

ただ、江戸時代に自由や平等の観念がある程度育っていたのが事実だとしても、そうした思想を背景に身分制を解体しようとするところまでは行かなかった。ネーションの観念が誕生するには、さらなる歴史的飛躍が必要だったこともたしかであり、その点を忘れると「日本特殊論」に陥ることになる。

たとえば、日本には戦死者を敵味方の区別なく供養する「怨親平等」の「伝統」があり、これが敵を苛烈なまでに処遇する朝鮮や中国の「伝統」と対比的に持ち上げられることがしばしばある。しかし、李世淵によれば、「怨親平等」の言説が広まるのは日清・日露戦争を契機に「戦争の文明化」を謳う赤十字条約に日本が加盟したことが契機だったのであり、とりわけ日清戦争では「文明対野蛮」という図式を背景に文明国からの施しという文脈においてこの言葉が語られたという(李 2012)。この例は、過去の歴史的断片が現在の政治的利害を正当化するために召喚され、再編成される過程を典型的に語っている。

そうした留保を踏まえながら、仏教的平等観や陽明学的素養の普及に加え、高い識字率や系譜的観念の希薄さ(中国や朝鮮のような明確な親族制度を持たない)といった特性も、日本でネーションの観念がいち早く現実性を獲得できた要因に挙げられるだろう。さらに、日本のナショナリズム成立の歴史については別の角度からの接近が可能であることにも注目しておきたい。

それは、日本は近隣国に比べ身分制の矛盾が深化していたからこそ、むしろその解体に躊躇なく進むことができたという見方である。たとえば、18世紀に朝鮮通信使として日本を訪れた申維翰^{シン・ユハン}は回顧録『海游録』のなかで、「日本の官位官職はすべて世襲であり、すぐれた才能をもち奥深い学問をもつ者であっても、自己実現をとげることはできない」と批判的見解を示している(吉田 2004:7)。

つまり、朝鮮や中国では科挙を通じた人材登用により身分制の矛盾を部分的に克服することが可能だったが、日本では才能のある人材が認められないという矛盾がより先鋭化していた。明治維新を担った多くの人材が下級武士から輩出されたことは、その傍証と見なせよう。中韓の伝統的身分制は、それを緩和する仕組みが備わっているだけにかえって解体、克服しがたく、それがなくなれば社会はいっきよに「流砂」へと崩壊するおそれのほうが強かった。

要するに、日本は近代以前にすでにある程度まで平等と自由の観念を育てていたため、ナショナリズムという新種のパラダイムを受け入れることが可能だったという見方ができる一方で、逆に江戸末期の日本は身分制の矛盾が近隣国と比べても限度に達していたからこそ、むしろ新たなパラダイムへと転換することが容易だったと考えることもできる。この点を突き詰めるのは後日の課題と

し、次に福沢諭吉の思想とナショナリズムの関係について見ておく。

2-2. 福沢諭吉の平等観

明治期日本におけるネーションのありかと方向性を示すのに、やはり福沢諭吉の言説ほど「見事な」例はないだろう。とくに『学問のすすめ』は、ネーションの要諦をやさしく説き、国家と人民を結びつけながら日本をナショナリズムの時代へと送り出した秀逸なテキストだといえる。初版は明治5年に発行され、それから今日までずっと版を重ねてきた国民的ベストセラーである*2。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」から始まる『学問のすすめ』は、平等の観念の大切さについて繰り返し強調している。ただし、「同等とは有様の等しきを言うにあらず、権理道義の等しきを言うなり」とあるように、ここでいう平等（同等）とは、結果の平等でなく、あくまで機会や社会的条件の平等という意味である。士農工商という封建的身分制を廃し、西洋にならって法の下での平等を唱えた明治日本は、万民が平等になる地上天国を理想として掲げたわけではなく、万民を競争に駆り立て、競争力のある国家を建設するための条件を整えようとしたのである。その条件が、身分制から解放された個人が自らの能力を高める努力を続けることにほかならない。福沢にとって、それはまずなによりも教育であり、「学問」を身につけることであった。

「人は生まれながらにして貴賤・貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」（福沢 2008）。

言葉を換えるなら、学問の修得を通じた能力開発のレースに加わらないかぎり、そして加わったとしてもそこから脱落した場合、人は敗残者の烙印を押されることになる。これはある意味で、封建時代の安定した身分より過酷な運命をもたらすことにもなる。あらゆる個人に地位上昇のチャンスが与えられている反面、不適応者は奈落の底に落ちていくしかない。ナショナリズムの中心的な価値としての平等とはそのような厳しいものであり、福沢は正確にそのことを理解していた。

ここから必然的に導き出されることだが、福沢にとっての国家と国民とは、所与の伝統や自然的存在ではなく、熾烈な競争を通じて実現されていく理想のモデルであった。「日本にはただ政府ありていまだ国民あらずと言うも可なり」という言葉からも明らかだが、新生日本に必要なネーションは、いまだ実現されていないという認識が啓蒙思想家としての福沢には強かった。ネーションが生まれるには、政府とともに個人が進化するしかない。そのためには政府は権威主義的な伝統を脱して人民に奉仕する機構へと変わらなければならないし、個人はお上を頼る心性を捨てて独立心を養わないといけない。そうやって個人と国家の関係が変わってこそ、日本は文明国への道を歩み出すというわけだが、そのとき中心的な役割を果たすのが学問を身につけ個人としての能力を磨いたネーションにほかならない。

「国の文明は上政府より起こるべからず、下小民より生ずべからず、必ずその中間より興りて衆庶の向かうところを示し、政府と並び立ちてはじめて成功を期すべきなり。西洋諸国の史類を案ずるに、商売・工業の道、一として政府の創造せしものなし、その本はみな中等の地位にある学者の心匠に成りしもののみ」（福沢 2008）。

国家主導でなく、民間が活力と創造性の源になってこそ、近代文明は開花するというわけだ。さらに、平等なネーションが国家を構成すべきだとしたら、国家と国家の関係もまた平等であるべきということになろう。「国とは人の集まりたるものにて、日本国は日本人の集まりたるものなり」というシンプルな国家観に立てば、国と国との間にも越えがたい不平等が存在する根拠はなくなる。「自国の富強なる勢いをもって貧弱なる国へ無理を加えんとするは、いわゆる力士が腕の力をもって病人の腕を握り折るに異ならず、国の権義において許すべからざることなり」というのが道理というものである。しかし、個人間の平等に過酷な運命が織り込まれているように、進歩というレースから脱落した国家もまた敗残者の烙印が待ち構えることになるのではないか。この点は、『学問のすすめ』の射程外ではあったが、やがて歴史の流れの中であぶり出されてくる隠された論点であった。

2-3. 福沢と朝鮮

福沢の主張は不変の定式でなく、具体的な歴史状況とともに変化する生きた思考の産物だった。孤高の思想家よりジャーナリストとして現実と対峙する道を選んだ福沢の言葉を後代の人間が読むとき、そのことを忘れるべきではなかろう。この点はとりわけ「脱亜論」をめぐる問題として、周辺国からみた場合の侵略性の有無について繰り返し論じられてきた。ここでは、福沢を神格化することもなければ、逆に侵略の先鋒として非難するような極端な論法も避け、できるだけその思想を歴史の機微の中で多角的に位置づけるような解釈に従いたい。月脚（2014）によれば、福沢の朝鮮観の振幅は、①「一小野蛮国」として無視・軽視する、②隣邦に対する同情・連帯感・「義侠心」から積極的関与をためらわない、③挫折から失意と悔恨に陥る、という3つのパターンから捉えることが可能である。

『時事新報』の主筆としてペンを振るうにとどまらず、ときとして熱い恋愛感情に近い思い入れで朝鮮の独立を助けたかと思うと、またあるときには侮蔑の気持ちを隠そうともしなかった。それは彼個人の気紛れというよりは、現実には激しく変動し続けた東アジアの情勢に刺激されてのことであつた。西欧近代文明に対する憧れから出発した彼の思想的歩みは、やがて日本自身と近隣諸国の運命の絡み合いを深く思量する試みへと比重を変えていった。日露戦争の前に亡くなった福沢の開かれた言葉は、今日でも多様な相続人を生み続けている。

隣邦への義侠心という強い思い入れが次第に失望や侮蔑の気持ちに変わっていった言葉を読み進めると、それはひとり福沢の偏見に帰することのできる問題でなく、日朝両国の人々、とりわけ政治家が自己の依拠するパラダイムから自由でなかったことが伝わってくる。

福沢は日朝関係を日米関係の敷衍から捉えようとした。日本が米国から受けた衝撃により近代化を実現したように、朝鮮の開国を実現した日本の指導により朝鮮も同様の軌道を迎ると予測した。そこには普遍的で楽観的な進歩主義から朝鮮を下位に位置づける目線があつたが、そうした差異を絶対視するような偏見はなかった。実際に、朝鮮の開化派を助け、近代化の実現に支援を惜しまなかった。そうした見通しが現実に裏切られ、ついには失意と悔悟に至る過程には、彼個人の偏見よりは現実の歴史状況に負う部分が大きかった。今日から振り返って、福沢の課題として指摘できる部分があるとなれば、それは異文化理解に対する認識不足といえるのではないか。

たとえば、『福翁自伝』のなかでアメリカに訪問したときの所感として「理學上のことについて

は少しも胆を潰すということにはなかったが、一方の社会上のことについては全く方角が付かなかった」(福沢1978: 142)と吐露している。彼は合理主義者であり、普遍主義的な価値と文明に対する深い理解を持っていたが、文化的差異に対する感受性は同時代人から抜きん出たわけではなかった。彼にとって社会と文化は一種のブラックボックスであり、同じ刺激を与えれば同じ結果が出る普遍的な機構として措定されていたのではなかろうか。だから、日本が受けた同じ刺激を朝鮮に与えれば、同じ帰結が得られるはずであった。ところが、現実には予想もしない抵抗や停滞に見舞われるだけでなく、「恩人」であるはずの日本に反発や怨恨をもって報いることのほうがはるかに多かった。

福沢自身は、『時事新報』に明治31年に書いた「対韓の方略」という論説において、「そもそも朝鮮には自らの朝鮮固有の習慣あり。その習慣は一朝にして容易に改む可きにあらず」と述べ、近代的な制度を移植すれば直ちに近代化が実現できるとする自らの見通しが誤りだったことを認めている(月脚 2014: 212-216)。

こうしたすれ違いから帰結する失意や葛藤はひとり福沢の問題ではなく、当時の日本の知識人が共有している問題でもあった。しかし、ナショナリズムという新種の集団意識が成立しない限り、近代国家の建設や近代文明の創造が頓挫するしかないという定式にいくばくか真理が含まれているとするなら、文化相対主義的な観点から福沢の「文明主義」を非難するだけでは片手落ちになる。文化的差異に対する理解と人間性の普遍的次元に対する信念は、多くの研究者に今日でも克服しがたいジレンマを突きつけているからだ。

3. 朝鮮におけるネーションの誕生と挫折

3-1. 朝鮮朝末期の模索と混乱*³

明治日本は計画的な軍事的挑発を盾に、1876年江華島条約(日朝修好条約)を朝鮮にたいして締結させた。釜山および他の二港の開港、日本による朝鮮沿海の測量および海図作成権、治外法権などの項目を含む、日米修好通商条約を手習ったこの不平等条約は、ついに李王朝の門戸をこじ開け、引き続いてアメリカ(1882)、清国(同年)、イギリス(1883)、ドイツ(同年)、ロシア(1885)などの諸列強に対しても開国、開港がおこなわれた。李朝の閉じられたシステムは根本的な再編成を迫られることになる。

開国からの20年間、朝鮮もそれなりの近代化政策を試みるが、旧来の政治的・文化的秩序を一新するには至らなかった。1895年、当時の金弘集内閣が日本の明治維新に範をとった「甲午改革」を断行し、政治制度だけでなく太陽暦の採用や「断髮令」といった生活習慣の近代化が試みられた。しかし、とりわけ断髮令に対する反発から各地で反乱が勃発し、義兵闘争(国難にたいする民衆の自発的挙兵)へと発展した。

それにしても、「断髮令」とはなんであり、そしてそれに対する激しい反発はなにを意味していたのだろうか。現代人にとって、それは要するに髪型の変更に過ぎない。政令の内容は、伝統的な髪型であるサントウ(まげ)をやめて、断髮・散髪せよということだ。日本でも同様の風俗改革が試みられたが、それは「断髮の自由」という形式だった。実質的には上からの半強制的な押しつけであり、それに対する反発も見られたが、基本的には追隨する向きが大勢であった。しかし、朝鮮では改革の担い手が親日派であることが周知の事実であり、日本人の一派が王妃を暗殺した事件の

ショックもさめやらぬ時期に上からの強圧的な改革がなされることに、賛成する人のほうがはるかに少数派だった。義兵闘争の指導的位置にあった崔益鉉は、「頭可断、髪不可断」、つまり「髪を切るならむしろ首を切れ」とまで言い放った。

崔益鉉の反発を支えたものは、大きくいって、儒教的身体観と「衛正斥邪」的世界観という相互に絡み合う二つのパラダイムだった。

「身体髪膚、これを父母に受く、あえて毀傷せざるは孝の始めなり」という有名な言葉が『孝経』にある。孝の概念を社会秩序の根底に置いていた朝鮮儒学では、髪は切らずにまげを結うのが成人男子の正しい作法であった。それは、今日感覚からいうヘアスタイルやファッションといったものではなく、道徳的観念の身体的表現にほかならない。類似の習慣は、民族的差異をともないながら、東アジアに共通する作法であった（劉 1990）。政府の指図で髪を切ることは、孝という社会秩序の根幹を揺り動かす事態であり、身体・意識・社会を貫く「伝統」への裏切りだったといえる。衛正斥邪とは、正学（儒教）を衛り邪道（西洋思想）を斥けるという意味で、朝鮮版の攘夷思想であった。つまり、「われわれ」こそが世界の中心であり、正しい秩序を実現した清浄な社会なのだから、外部の不純な要素を招き入れることは道徳的退廃にしかならないという考え方だ。

崔益鉉らの衛正斥邪は、西洋列強に向けられたものだったが、日本との間で結ばれた不平等条約、江華島条約を境に、日本は西洋と一体化したという「倭洋一体論」へと転化する。伝統を忘れて西洋人のように洋服をまとい、断髪をした日本人は、もはや東洋の隣邦でなく、排すべき夷狄、否、禽獣にほかならないということになる。

守旧派といっても、実は一枚岩の存在ではなかった。衛正斥邪を掲げて西洋の軍艦を追い払ったのは当時の執権者、大院君だったが、彼と崔益鉉は共通の価値観で結ばれていたかという点、必ずしもそうではない。大院君に逆らった崔益鉉は、1868年と73年に濟州島に島流しの刑にあっている。「倭洋一体論」を唱えて江華島条約締結に反対したときには、多島海の黒山島に流された。最後は、日本の進出に反対して義兵運動を起こし、日本軍に捕まって対馬に監禁されるが、日本人から出される食事を口にしようともせず、74歳で餓死した。

崔益鉉の苛烈な生き方は、身体化された生きた思想に基づくものだった。その倫理観は民衆の運動と強く共鳴しながら、体制側とはむしろ衝突を繰り返した。彼の反日的な言動は、彼の思想と歴史状況との接合からもたらされる一展開であり、必ずしも思想の核心ではなかったことも重要である。さらに重要なポイントは、身体化された価値観としては共有できる部分が小さくなかったはずなのに、支配層と農民が手を結ぶことは極めて難しかったという点である。当時、西洋の侵略に衝撃を受け土着的な宗教的・社会的運動が「東学」という名で半島西南部を中心に広がっていたが、義兵運動を率いた崔益鉉は、蜂起した農民のことを「東学土匪」と蔑んではばからなかった。天から夷狄へと至る伝統的な華夷的世界観の中で、朝鮮の「内部」における階級的な段差はもっとも脆弱な絆で結ばれていたといえる。そこには革命でも乗り越えることのできない数百年にわたる身分間の深淵が横たわっており、それが取り払われるにはネーションという強力な観念が必要であった。

朝鮮時代末期の近代化への模索は、基本的に周辺国との提携の模索を通じて進められたが、これが国内の政治的分裂や野心と結びつくことで、幾重にも入り組んだ混乱の渦を招き寄せることになった。当時の漢城（ソウル）は、派手な見世物を次々と繰り出す生まれだての劇場のようなものだった。王室と官僚らは日本、清国、ロシアの間を往復しながら複雑な演技をこなし、そのうち次

第に誰が主役でどこにシナリオがあるのかも分からない状況になっていった。中心には11歳で即位させられた高宗、その実父の大院君、そして王妃の閔妃からなる不安定な三角形が存在した。それぞれの思惑と野心をかかえた複数の主役とシナリオが混在し、理想と陰謀と権謀術数が交錯しながら救いようのない混乱をもたらしたあげく、最後はいつも軍事的制圧による無理やりの幕引きを見るのだった。後から振り返れば、そのプロセスは日本が支配権を確立していく段階的な歩みに見えるが、同時代の視点から見れば決してそのような安定した歩みではなかった。

王室を舞台とした複雑な政治劇についてここで詳しく語ることは控えるが、改革派がネーションの成立に向けた格闘にだけ触れておく。この時期の若手エリートたちはさかんに日本に留学や視察をおこない、福沢諭吉ら開化派人士と交流しながら、新時代の思想や文明を吸収しようとした。それが王室政治劇に新たな衝撃をもたらすことになる。1884年、若手官僚の金玉均キム・オクギョらが日本をモデルにした近代化を実現するため、「勢道政治」を打倒するクーデターを起こし、新政府樹立を宣言する（甲申政変）。クーデター計画の背後には日本公使らの協力があり、また国王も了承していたとされる。しかし、清国軍によって鎮圧され、文字通り三日天下で終わる。

大院君と実権を争っていた閔妃は、亡命先の日本を転々としたあげく上海に滞在していた金玉均に刺客を差し向けてついにその命を奪う。遺体は清国の軍艦で母国に運ばれ、「凌遲刑」という最大の恥辱をもって迎えられた。すなわち全身が細切れに切り刻まれ、頭、手足は切断され別々の地で晒しものとなったのである。1894年3月末の出来事だが、この年の2月、全蹙準率いる東学農民軍が蜂起し、国王を中心とした旧秩序の復興を叫ぶ。そのとき国父のイメージとして農民の脳裏にあったのは、排外主義を貫いた大院君にほかならなかった。

同じ年の7月、農民戦争を機に駐留していた日本軍は王宮を占領し、前述したように閔氏政権を打ち倒して誕生した金弘集キム・ホンジプ内閣が「甲午改革」と呼ばれる急進的な近代化を実現しようとする。日清戦争における日本の勝利を背景に、「上からの近代化」は軌道に乗るかに見えたが、翌年いわゆる「三国干渉」を境に閔妃はロシアと手を結んで巻き返しを図り、権力闘争が再燃する。

局面の打開を図ろうとした日本は、三浦梧楼陸軍中將を新たな公使として派遣したが、彼は武装集団を指揮して王宮を占拠し、その混乱に乗じて閔妃は殺害される（乙未事変）。政敵、閔妃の死の2日後、大院君は王妃の身分を剥奪し、遺体は平民として埋葬される。彼自身、その後も表舞台に復帰することはなく、事変から2年も経たないうちに79歳で没する。

金弘集内閣による改革は、そうした混乱の間も続けられたが、民衆の支持を得ることは最後までなかった。日本軍駐留下における改革や閔妃殺害に対する手ぬるい処置は、民衆に強い反発と反日感情を抱かせ、復古と「国母復讐」をスローガンにした義兵闘争がその後各地で勃発することになる。その機を狙い、親露派の勢力がクーデターを敢行し、国王はロシア公使館に逃げ込んでそれを容認する（俄館播遷）。金弘集は暴徒によって撲殺され、遺体は市中引き回しにされた。

金弘集政権が倒れてからは、親露派と親米派が中心になった政権が誕生し、断髮令の中止などを発表する。しかし、国王の逃避という恥辱にたいする怒りから、義兵闘争はその後もしばらく続いた。ロシアもやはり自国の権益拡大に奔走することがはっきりし、高宗は1年後に王宮に戻ってロシアからも距離をとろうとする。

そうしたなか、高宗は官僚らの意見を取り入れ、1897年10月12日に皇帝即位式を挙行し、国号を大韓帝国と改めた。この歴史的な出来事について、『独立新聞』は次のように報じた。

「朝鮮は数千年の王国を経て、ときに清に属して属国の待遇を受け、清に使われて過ごしたときが多かったが、…今月一二日に大君主陛下が朝鮮有史以来初めて大皇帝に進み、その日から朝鮮がけだし自主独立国であるのみならず、自主独立した大皇帝国になったのだから…どうして朝鮮人民であることに…感激せずにはいられようか」

『独立新聞』は、徐載弼(ソ・ジェピル)らが1896年に創刊した新聞で、初めてのハングル表記の新聞だった(一部の記事は英文)。徐は金玉均と幼なじみで、日本留学を経てともに甲申政変を起こした。挫折後はアメリカに亡命し、医学を学んだ。1895年に帰国して李完用(イ・ワンユン)(親露派政治家として「俄館播遷」に関わり、後に親日派に転向)とともに独立協会を組織し、祖国の近代化に向けた啓蒙活動に取り組む。「自主独立」「自由民権」「自強改革」を旗印にした政治団体として、公開討論会を頻繁に開きながら公論を醸成した。『独立新聞』はその機関誌という性格が強いものだった。また、清への服従を象徴する「迎恩門」を壊し、募金を集めてそのすぐ隣に「独立門」を建設するという事業をおこなった。それは、単に前近代的な宗属関係からの脱却にとどまらず、日本やロシアを含むあらゆる列強からの独立を意味していた。

ロシアに対する批判を強めていくところまでは、政府と独立協会は歩調を同じくしていたが、議会設立運動が始まると両者は離反していく。立憲君主制を目指す独立協会は、絶対王政を維持しようとする高宗と衝突し、1898年12月、運動が始まってわずか2年半で強制解散させられる。始まったばかりの運動は一般民衆から遊離しており、まだ守旧派の復古主義のほうを受け入れられやすい時代だった。徐載弼は再びアメリカに亡命し、ナショナリズムと民主主義の種子は芽を出しかけたところで摘まれてしまうことになる。

大きな苦痛を伴う乱流は収まることなく、日本とロシアの角逐によって朝鮮半島の運命が左右されることははや避けられない段階に来ていた。朝鮮と満州(中国東北部)の權益をかけて日露戦争が戦われるのは1904年2月から翌年9月にかけてであり、戦後すぐの11月17日に第二次日韓協約(乙巳條約)が調印され、外交権を譲り渡した朝鮮は日本の保護国となる。特派大使・伊藤博文の脅迫的な説得でこのときの条約締結に賛成した5人の閣僚は「乙巳五賊」と呼ばれ、今に至るまで国賊扱いされている。高宗は最後の抵抗として、1907年6月にオランダのハーグで開かれた第2回万国平和会議に親書を携えた密使を派遣し、条約の不当性を訴える(ハーグ密使事件)。しかし、列強からは一顧だにされず、翌月には長男の純宗に譲位させられる結果となる。

1910年8月22日、「韓国併合ニ関スル条約」が調印され、朝鮮は日本の領土の一部になる。当時の国号が大韓帝国であったことから、これを韓国併合と呼んだ。日本に併合されたとはいえ、帝国憲法が適用されたわけではなく、「朝鮮は天皇大権にもとづき植民地統治の委任をうけた総督が、独自に法律担当の令を発することができる異法域とされた」(海野 1995: 216)。日本でありながら日本でないという二重性が、これから35年間にわたって朝鮮社会を特徴づけ、社会運動と文化的創造の基礎となる。

3-2. ナショナリスト第一世代、申采浩*⁴

激動といってよい19世紀後半の東アジアの情勢だが、今日から想像する以上に当時の輿論には大きな広がりがあった。たとえば中江兆民の「三酔人経綸問答」(1887)は、決して孤立した例で

はなく、現実でも自由民権と国権論の間で開かれた議論を応酬する余地が残されていた（上垣外 1994）。東アジアの情勢をめぐる理解と日本のとるべき選択肢には多様な意見があり、この時点ではまだ未来は開かれていた。それを悲劇的な方向へと収斂させていく大きな要因として、ナショナリズム成立以前の近隣国に対する日本の無理解があり、また急速に変化する日本に対する近隣国の無理解があり、その双方が刺激し合う悪循環があった。

そうした揺籃のなかでさまざまな思想と理念が火花を散らしながら登場し、また消えていった。社会変動の起源も思想の起源も西洋にあったが、それらが競合を繰り返しながら方向性を定めていく過程は、東アジアの情勢とその地の頭脳の対話ないし対決が左右したのである。その一つの方向性を決定づけた思想家として、申采浩^{シン・チネホ}がいる。朝鮮朝末期から植民地期にかけてナショナリズムが誕生してくる過程において、彼の名前を欠かすことはできないし、また今日の韓国と北朝鮮に大きな影響を与え続けているという意味でも特別な位置を失っていない。

近代化と結びついたナショナリズムが成立する一つの重要な契機は、アンダーソンがいうように出版資本主義の誕生であり、新聞を読むという不特定多数の精神のなかで同時進行する「儀礼」が見知らぬ者を結びつけるその独特の形式が普及することである。また、I. パーリンがいうように、哲学者や歴史学者が書齋の中で孤独に紡ぎ出す言説が「民族意識」として内面化されていく過程も決定的に重要な契機となる。申采浩は、韓国併合を前後する時期に、その双方の任務を爆発的生産力を発揮してこなした人物である。

1880年、申は忠清南道の両班^{ヤンバン}の家に生まれた。18歳の時、当時の最高教育機関、成均館に入って朱子学的な教養を磨き、また「独立協会」に参加して新時代の思想にも触れた。1905年から『皇城新聞』の論説記者として活躍を始めるが、同年11月の第二次日韓協約に抗議する論説を掲げ、停刊処分を食らう。その後は、『大韓毎日申報』の論説記者として活躍するのだが、これは1904年にイギリス人ベッセルによって創刊された新聞であり、事前検閲もなく日本の権力から離れたメディアで思索し、表現する自由を彼に与えた。とくに、1908年8月から12月にかけて連載した「読史新論」という記事の中で、「民族」という概念に初めて本格的な考察を加え、朝鮮の読者に紹介した。それは学問的というよりは、論争的な内容であり、申自身が後に「独断的であった」と回顧している。しかし、その「思想」は、後の朝鮮・韓国におけるナショナリズムに決定的な影響を与えた。

申にとって「民族」とは、自分がことさら作り出した概念ではなく、精神分析にとっての「無意識」のように、原初から存在していながら勝手に気づかれていなかったものを指す記号だったといえるかもしれない。それは歴史、わけても古代の歴史と不可分の関係を持つものである。歴史は民族なしに存在せず、逆に民族のない歴史というものも想像できない、それほど両者は不可分の関係にあると考えられた。また、歴史を「我」と「非我」の闘争の過程として捉え、物質的な「小我」とらわれない精神的「大我」こそが歴史の主体たる民族であると主張した。

国家と民族との関係については、植民地支配の現実を前提にした場合、より屈折した考察が求められた。国家とは、家族の延長であり、民族精神で統合された有機体である。しかし、民族とはさらに超越的な実体であり、たとえ形式的な国家が減びても、精神的国家が健在であれば民族が減びることはない。

こうした考え方には、あきらかにドイツ流のロマン主義的観念の影響が見られる。また出版資本

主義と「想像の共同体」との結びつきが「民族」や歴史意識といった形で紡ぎ出されていく様子も具体的に確認できる。そして、そうした思想がなにより「抵抗」として生きられている点もまた、ナショナリズムの一般的なシナリオに従うものであった。

しかし、非西欧社会におけるナショナリズムやロマン主義が、啓蒙主義や社会進化論に対する抵抗として始まったのに対し、朝鮮におけるナショナリズムの誕生は、むしろそういった帝国主義的な運動と不可分の連携を結ぶところに大きな特徴があるといえるかもしれない。

たとえば、同じ時期に「愛国啓蒙運動」と呼ばれる文化運動が繰り返されてきたが、この中には啓蒙主義と民族主義が同居していた。1906年に結成された「大韓自強会」(尹致昊会長)が核となり、都市知識人、学生、民族資本家などが民族意識の高揚と独立を掲げながら、言論、出版、教育、民族産業育成といった活動を展開した。これを「愛国啓蒙運動」ないし「愛国文化啓蒙運動」と呼ぶ。「大韓自強会」は、まず教育と産業の振興を図り、将来の独立を目指すという実力培養論を唱えるが、1907年に保安法違反により解散させられる。なお、尹致昊はその後も教育家やキリスト教指導者として活躍するが、戦時時期になると対日協力を推進し、「協和的内鮮一体論」を唱えるようになる。韓国の国歌の作詞者ともいわれるが、解放後、親日行為に対する非難から自殺する。

一方、申采浩は1910年、韓国併合の直前に国外へ脱出し、独立運動の基地、ウラジオストクに滞在、さらに上海、北京等で活動を展開した。1919年の三・一独立運動を受け、上海での大韓民国臨時政府樹立にも関わるが、李承晩イ・スンマンの大統領就任に反対し、この運動から離反する。北京の申は窮乏に耐えながら歴史研究に打ち込み、論文を次々と執筆し、「近代民族史学」の基礎をつくりあげた。現実の環境が険しくなるにつれ、歴史を抵抗の手段として理想化する程度がエスカレートしてゆき、またその探究の矛先は古代の闇へとどんどん延びていくことになる。朝鮮民族を伝説上の壇君の末裔として規定した彼は、『朝鮮上古史』を次のような表現で始めている。

「歴史とは何であるか？人類社会の「我」と「非我」の闘争が時間とともに発展し、空間的に拡大して行く心的活動の状態の記録であって、世界史といえれば世界人類のかくなり来たった状態の記録であり、朝鮮史といえれば朝鮮民族のかくなり来たった状態の記録である。…我に対する非我の接触が頻繁になればなるほど非我に対する我の奮闘がより一層猛烈になり、人類社会の活動はやむとぎがなく、歴史の前途が完結される日はないのである。それゆえ歴史は我と非我の闘争の歴史なのである」(申 1983: 3)。

申の歴史観は典型的な闘争史観であり、社会進化論や帝国主義を否定するのではなく、むしろその同じ論理に深く刻み込まれながら、現前に存在しない古代史の舞台で自民族の失われた栄光を取り戻す象徴的実践であったといえる。

別の言葉でいえば、彼は決して頑迷な伝統主義者ではなく、植民地状況という現実と向き合いながら「民族」の言説をつくりあげた「近代主義者」であった。かれは、成均館という儒教の殿堂で学びながら、1905年には断髪を実行し、また儒教の弊害に対しては非常に厳しい批判的姿勢を崩すことがなかった。壇君を民族の始祖として持ち上げはしたものの、その命が千年続いたといった伝承は迷信として退け、したがってそれを根拠とする「壇紀」を採用することもなかった。

申の探求した方法は実証主義的な手法というよりは、文献考証に基づきながらもみずみずしい詩

的直観にインスパイアされた言説だというほうがふさわしく、中国にも日本にも依存することのない民族の栄光の起源を満州や渤海の古代史に求めた。こうした考え方を基礎に、亡命先で舌鋒鋭い日本批判を繰り返して、それは独立運動に関わる者の精神を激しく鼓舞した。たとえば、1923年に公表した「朝鮮革命宣言」は、植民地時代に書かれた抗日宣言文のなかでも特別な位置を占めるといわれるものだが、そこには次のように日本との決死の対決を訴える表現が踊っている。

「民衆は我らが革命の大本営だ。暴力は我らが革命の唯一の武器だ。我々は、民衆の中に入り、民衆と握手し、不滅の暴力、暗殺、破壊、暴動によって強盗日本の統治を打倒し、我らの生活にとって不合理な日帝制度を改造し、人類として人類を圧迫することなく、社会として社会を搾取することのない理想的朝鮮を建設せねばならぬ」(召 2010: 163)。

しかし、現実の独立運動には失望することも多く、思想的にはやがて無政府主義に傾いていく。1928年、運動資金を調達するため台湾を訪れたところ、為替偽造により日本の官憲に逮捕され、懲役10年の刑を宣告される。1936年、旅順にて獄死。主著である『朝鮮上古史』は、書きかけの草稿が収監中の1931年に『朝鮮日報』に連載され、出版されたものだ。申の手で校正する機会はなく、未完成のまま終わった書物だが、朝鮮古代史研究の嚆矢を切り開き、歴史と民族の交わる地点にどのような問題が広がっているかについて初めて全体的なビジョンを与えた。それはまた、ディアスポラ・ナショナリズムの特徴を鮮やかに予言するものでもあった。

申が息吹を与えた民族の観念は、理想化された民衆文化に基礎をおくもので、自由で平等なネーションの本質を体現していたが、国家という骨組みを欠き宿敵日本に対する敵意が鋭化していくにしたがい、自由や平等という果実は遠のき、鉄のような集団的アイデンティティと自尊意識だけが肥大化していく末路を避けられなかった^{*5}。それは、戦時体制に突入していくにしたがい日本も共有することになる傾向であり、ルサンチマンとしてのナショナリズムの具現に他ならなかった。

最後に、申は福沢と同じように走りながら考える思想家であり、後代の人間があまり一貫性を押し付けると思考の振れ幅について行けなくなるだろう点を指摘しておきたい。彼の「奇才」や「奇癖」はしばしば指摘された性向であり、亡命先という特別な状況を考へに入れたとしても、そこには福沢にないある種の「狂気」が傑出していたといえる。異国の地で思索と懊悩を繰り返すうち、彼は合理主義的な近代主義者の顔を脱ぎ捨て、強者に対する弱者の唯一の武器として「呪詛」を称賛するようにさえる。こうした問題を理解するには深い文学的想像力を必要とするため、あまり歴史家や研究者が触れたがらないポイントとなっている。しかし、ある意味でこれは申の思想の革新性を証言するとともに(趙 2007: 46-48)、ナショナリズムから狂気に至るグリーンフェルド的な問題設定を考察するにも重要な手がかりを与えてくれる。それは、熾烈な競争にかり出された魂が辿ることになる狂気としてのナショナリズムのロジックを先取りしていると見るのできるのである。

4. 平等と排除

20世紀を挟む時期、東アジアに普及しつつあったナショナリズム、ないしネーションという概念をめぐる言説には、まだ明瞭な輪郭がなかった。それは、帝国主義(植民地主義)、アジア主義、

社会主義といった類似のイデオロギーと融合や競争を繰り返しながら、何より現実の歴史状況との格闘を通じて独自の輪郭を獲得しようとしていた。日本にとっては、膨張し続ける帝国の版図と「日本人」というネーションをいかに整合化させるかが理論的かつ実践的な課題であった。

この問題を歴史的に緻密に検証した小熊英二は、「朝鮮人」が「日本人」として包摂されつつ排除された過程について、国籍問題をめぐる当時の議論を分析しながら次のように述べている。

「韓国人たりし日本人」は、「外国に対し」では「日本人」だが、「内国」において「日本人たりし日本人」と対等にあつかうか否かは別問題だという。つまり、彼らは対外的には「日本人」だが、国内においては「日本人」ではないのだ。そしてこの後、日本国籍を付与して対外的に「日本人」に編入しつつ、戸籍によって国内的に「日本人」から排除するという体制が築かれてゆく（小熊 1998：155）。

類似の差別的待遇は沖縄や台湾についても認められたが、ネーションをめぐる日本の立場は基本的に状況主義的でありご都合主義と呼べるものであった。帝国内に増え続ける「異民族」の包摂と差別を同時並行的に許容し、さらには戦時体制へと突き進む中で 1940 年代になると、（申采浩の考えとは対極的に）国家を民族の上位におかざるを得なくなる。朝鮮総督府の公式見解として、西洋の民族主義は「東洋の精神に則る民族協和思想」によって克服されるべきことが主張された。「国家は民族を基礎として成立するのではなく、民族を超越したものとされる。そして民族は、国家によって自由に破壊され、あるいは創造されるものでしかない」（小熊 1998：425）と位置づけられるようになるのである。

日本は、近隣諸国と比べると比較的スムーズにネーションを確立し、富国強兵に邁進することに成功したといわれる。しかし、そこには成功したからこそ露呈する特殊な矛盾があった。その特別な局面が、ネーションの拡張をどこで止めるべきかという問題だった。

言葉を換えるなら、帝国と国民国家に本質的な差異はないということでもある。ナショナリズムは、（とくにアジア・アフリカにおけるそれは）帝国主義ないし植民地主義にたいする反抗や対立概念として位置づけられることが多いが、実際には切り離すことのできない本質的絆で結ばれている。たとえば、イギリスの経済学者、ホブソンは古典的な帝国主義論の中で次のように述べている。

「植民地主義は、ネーションの一部を外国の空白地帯や希薄な人口の土地に移住させることであり、移住者は母国の市民権をすべて持ち込むか、そうでなければ現地の自治政府を母国の制度に近似させて母国が最終的支配権をもつように作り上げるのだから、それは国家（ナショナルティ）の純然たる拡張であり、ネーションの血統、言語、制度の領土的拡張であると見なすことができる」（Hobson 1902: 8）。

植民地主義はネーションの拡張であり、支配者の制度や文化を被支配地域にもちこむ過程にはかならない。明治政府にとって、地方的な差異を地ならししていく政策と民族的な差異を地ならししていく政策に、暴力性の程度を除いて基本的な違いはなかったといっても過言ではない。それはともに、「日本」の領土を確定・拡張し、そのなかで「日本人」という「新種」をつくり出す過程だった。「沖

縄人」と「朝鮮人」を「日本人」にする過程で、どちらかだけの特権視する根拠などない。どちらも「空白地帯」であるどころか、稠密な人口と古い伝統をもつ独自の国家だったのであり、日本の一方的な拡張を許すいわれはない。「日本人の境界」は、本質的な「民族性」によって内側から規定されたのではなく、国家とネーションの自己実現的な力と帝国の伸張に合わせて偶有的に見出されていったのである。ドイツの歴史学者マイネッケは、20世紀初頭にこのことを雄弁に語っている。

「人びとのうちにひとたびネーションという一大共同体の十分な意識が目覚め、それがこのような共同体を求め強い憧れにまで高められるならば、この憧れは、満たすことのできるすべてのものの中に流れ込み、一般にネーション化されるすべてのものがネーション化されるまでは満足しない、一つの洪水に似たものとなる。けっきょくこの経過は、個々の人格とその生活圏の大規模な拡大である」（植村 2014: 261）。

ヨーロッパ諸国のネーションが新世界という「空白地帯」に流れ込み、西洋の政治制度と生活習慣を広げていったことが今日の世界秩序の基本をなしている。そこでも、原住民の虐殺や差別に起因する後遺症が今日まで尾を引いている。南極などのほんの限られた地域を除き、そもそも地球上に「空白地帯」などないというべきだし、とりわけアジアはそうだとはいえる。そこは、西洋の欲望の絵具で自由にデザインできるような真っ白なキャンパスであるどころか、複雑な権力関係と多様な伝統とおびただしい数の人間が入り組んだアラベスクをなす世界であった。日本のネーションの伸張は、そのような地において、しかもごく近隣の国々に対して敢行された。いうまでもなく、そうした試みは無数の反抗と反発によって報われるしかなかったが、その様態はその地においてナショナリズム成立の前か後かで大きく変わったのである。

先走った見解を付け加えるなら、植民地主義を否定しながらナショナリズムを肯定するのは自己矛盾であり、この戦略には袋小路が宿命づけられているだろう。言葉を換えるなら、日本による朝鮮の植民地支配は、差別を伴う同化や皇民化という自己矛盾的な包摂の過程であり、それに対する朝鮮の反応も自己矛盾的で分裂したものにならざるを得なかった。それは民族という絶対神を崇めながら日本を否定・殲滅する現実的＝象徴的な暴力に没入するか、現実的＝想像的な利害を見すえながら植民地状況で自強を図るといふ捻れた希望を信奉するか、そのいずれかしかなかった。無視、義侠心、失望という表現のサイクルをめまぐるしく描いた福沢諭吉と、亡命先で民族主義の剣をひたすら研ぎ澄ませていった申采浩は、一度も現実に出会うことのないまま両国のナショナリズムの絡み合いとコントラストを悲劇的なまでに予言していたのである。

* 1 アンダーソンは、「歴史家の客観的な目には国民が近代的現象とみえるのに、ナショナリストの主観的な目にはそれが古い存在とみえる」（アンダーソン 1987: 15）ことをナショナリズムにつきまとう三大パラドクスの筆頭にあげている。しかし、トマス・クーンを持ち出すまでもなく、新たなパラダイムが過去の見方まで刷新してしまうのは必然であって逆説でない。ここには、左右の政治的対立や客観／主観の二分法を超えた問題が横たわっている。

- * 2 ここで引用する福沢のテキストは、「青空文庫」に依拠することにする (http://www.aozora.gr.jp/index_pages/person296.html#sakuhin_list_1)。現時点では全作品が公開されているわけではないが(たとえば、『福翁自伝』は岩波文庫版に拠っている)、検索機能によりキーワードの検証が容易なので、実証的なテキストクリティックには非常に有用なリソースであるといえる。以下、福沢の朝鮮観までの叙述にあたり、主に次の文献を参考にした。月脚 (2014)、杵淵(1997)。
- * 3 この部分の叙述は、主に次の文献に負っている。李 (2006)、呉 (2000)、シュミット (2007)、カミングス (2003)、月脚 (2009)、Shin (2006)。
- * 4 この部分の叙述は、主に次の文献に負っている。趙 (2007: 30-67)、池 (1987)、曹 (2012)、召 (2010)、召 (2011)。
- * 5 申采浩の思想の意味は、あくまで当時の時代状況の中で理解されるべきである。ただ、問題はその影響が今日の韓国や北朝鮮にも及んでおり、時代錯誤的な弊害をもたらしているところにある。たとえば、他者との闘争と民族を絶対視して歴史研究を定立する考え方は、韓国で「国史」の枠組みとして今日まで受け継がれているが、そうしたパラダイムは、「自国史の世界史的な連関性を認識できない一国史」(召 2010: 136)を常識として蔓延させ、世界に対する人々の認識を狭めてしまう危うさを内包している。
- * 6 朝鮮(韓国)のナショナリズムを理解するアプローチとして、イデオロギーを強調するものと政治経済的な状況論から分析するものに大別できるだろう。観念を重視する歴史家や研究者の著作に申采浩の名前が登場しないことはありえないが、逆に後者のタイプの研究では軽視される傾向が強い。こうした分断の結果、観念論は重く、状況論は浅いという偏りが生まれているが、ナショナリズムの全体的な理解にとってその双方が必要であることはいうまでもない。

参考文献

- 上垣外憲一 (1994) 「明治前期日本人の朝鮮観」『日本研究』11、41-57。
海野福寿 (1995) 『韓国併合』岩波新書。
植村和秀 (2014) 『ナショナリズム入門』講談社現代新書。
小熊英二 (1998) 『<日本人>の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社。
カミングス、B. (2003) 『現代朝鮮の歴史』(横田・小林訳) 明石書店
杵淵信雄 (1997) 『福沢諭吉と朝鮮』彩流社。
呉善花 (2000) 『韓国併合への道』文春新書
シュミット、アンドレ (2007) 『帝国のはざま——朝鮮近代とナショナリズム』(糟谷憲一他訳) 名古屋大学出版会。
申采浩 (1983) 『朝鮮上古史』(矢部敦子訳) 緑蔭書房。
鈴木貞美 (2009) 『自由の壁』集英社新書。
曹明玉 (2012) 「申采浩の「我」言説研究 - アイデンティティの政治という視座から」『ソシオサイエンス』18: 49-64。
池明観 (1987) 「申采浩史学と崔南善史学」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』48: 135-160。
趙寛子 2007 『植民地朝鮮 / 帝国日本の文化連環: ナショナリズムと反復する植民地主義』有志舎。
月脚達彦 (2009) 『朝鮮開化思想とナショナリズム——近代朝鮮の形成』東京大学出版会。
——— (2014) 『福沢諭吉と朝鮮問題』東京大学出版会。
ハーバーマス、ユルゲン (1994) 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』(細谷貞雄・山田正行訳) 未來社。
福沢諭吉 2008 『学問のすすめ』青空文庫 (http://www.aozora.gr.jp/cards/000296/files/47061_29420.html)。
——— 1978 『新訂 福翁自伝』岩波文庫。
ベラー、R.N. (1996) 『徳川時代の宗教』(池田昭訳) 岩波文庫。
前田勉 (2012) 『江戸の読書会——会読の思想史』平凡社選書。
吉田光男 (2004) 「朝鮮半島に視点をおいてみる」吉田光男編『日中韓の交流——ひと・モノ・文化』山川出版社、5-26。
李成茂 (2006) 『朝鮮王朝史 (下)』日本評論社。

李世淵 (2012) 「日清・日露戦争と怨親平等」『日本仏教総合研究』10:69-87.

劉香織 (1990) 『断髮—近代東アジアの文化衝突』朝日新聞社.

Hobson, John A. (1902) *Imperialism: A Study*. James Pott & Co.

Shin, Gi-Wook. (2006) *Ethnic Nationalism in Korea: Genealogy, Politics, and Legacy*. Stanford UP.

김기봉 (2010) 「21 세기 한국 역사학을 위한 단재사학의 의미는 무엇인가」 [21世紀韓国歴史学のため采浩史学の意味は何か]충남대학교 충청문화연구소『단재신채호의 사상과 민족운동[丹齋申采浩の思想と民族運動]』경인문화사, pp. 135-168.

김삼웅 (2011) 『단재 신채호 평전 2판 [丹齋申采浩評伝 2版]』시대의창